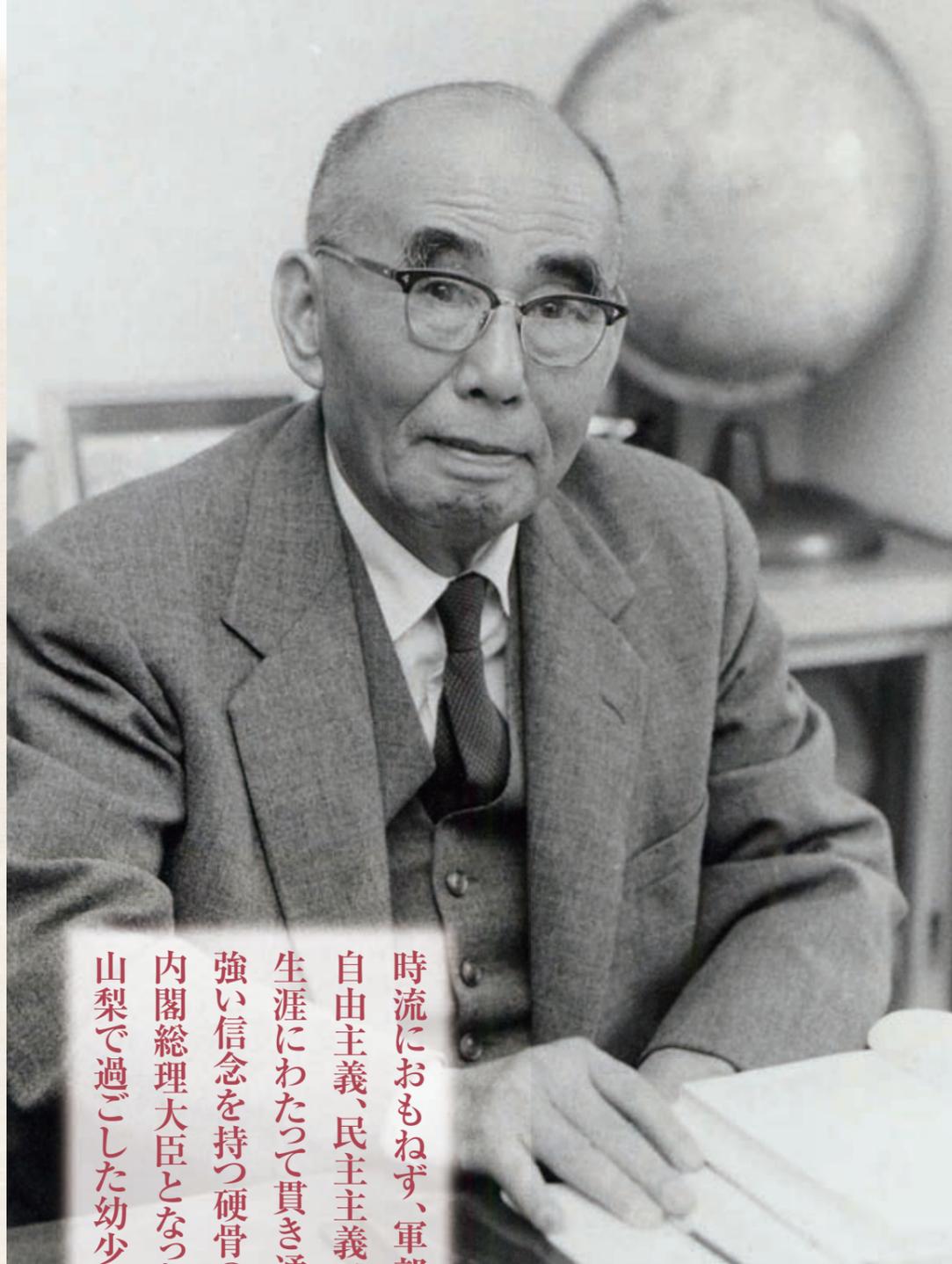


# 石橋湛山

1884-1973

立正大学 情報メディアセンター所蔵



時流におもねず、軍部に屈せず  
自由主義、民主主義、平和主義を  
生涯にわたって貫き通した石橋湛山。  
強い信念を持つ硬骨の言論人であり  
内閣総理大臣となった彼の哲学の礎は  
山梨で過ごした幼少年時代に培われた。



石橋湛山が中学時代に寄稿した「校友会雑誌」



甲府一高にある石橋湛山書「Boys, be ambitious!」の碑。レリーフは大島正健氏

## 硬骨の基礎が培われた 少年時代

石橋湛山は、1884（明治17）年、父・杉田湛誓と母・きんの長男・省三として生まれた。

1885（明治18）年、父が故郷南巨摩郡増穂村（現・富士川町）に寿命山昌福寺の住職として赴くに当たり、母と西山梨郡稲門村（現・甲府市伊勢2丁目）に移住。湛誓は、寺院での厳格なしつけを湛山にも施すとともに、小学生だった湛山に漢文を学ばせるなど高度な教育を行った。

1894（明治27）年、静岡市の青龍山本覚寺に栄転する父の考えにより10歳の湛山は中巨摩郡鏡中条村（現南

アルプス市）にある恵光山長遠寺の住職望月日謙（後の身延山久遠寺第83世法主）に預けられることに。これは孟子の「古者子を易えて、之れを教ゆ」（昔の賢者は、お互いの子どもを交換して教えた）との言葉に従ったことで、中学を卒業するまでの8年間、父母との交流はほぼ絶たれることになるが、湛山は望月師の元で父から受けた日蓮宗の教えをさらに深めていった。

## 生涯の師との出会い

優秀な生徒だった湛山は、1895（明治28）年4月、山梨県尋常中学校（現・甲府一高）に皆よりも2年早い11歳で入学した。ところが、まだ体力的



県立博物館 山梨の偉人コーナー（常設展内）



石橋湛山が揮毫し、甲府一高に寄贈された「Be Gentleman」の書

から親しんだ「実践・行動」を重んじる日蓮宗の教えだけにこだわることなく、その基礎の上に合理的な判断や自由主義、民主主義という新たな土台を築いていったのである。それこそが今日「湛山思想」と呼ばれる彼の哲学の根幹を成すものであった。



石橋湛山記念財団から甲府一高に寄贈された胸像（藪内佐斗司 作）

## 論壇の雄として活躍後、政界へ

中学卒業後、早稲田大学の哲学科を首席で卒業した湛山は、後に東洋経済新報社へ入社。大正から昭和にかけてオピニオンリーダーとして民主主義を提唱し、強い信念を持つ論壇の雄として大いにペンを振るった。しかし、太平洋戦争を回避できなかったことから言論活動に限界を感じ、戦後は政界に進出。第二次吉田内閣で大蔵大臣を務め、戦後経済の再建を推進。1956（昭和31）年には第55代内閣総理大臣に就任した。

就任直後、病に倒れわずか63日で辞任するも、その後政界復帰を果たし中国との国交回復などに尽力した。日中国交正常化から1年後の1973（昭和48）年、88歳で生涯を閉じた湛山。その枕もとには、手放すことなかった「日蓮遺文集」と「聖書」が置かれていた。

〈記事監修〉山梨大学 名誉教授 齋藤康彦